

令和7年度

東京都教育委員会職員表彰

(学校・グループ)

教育活動実践の概要

東京都教育委員会

目 次

〔 小 学 校 〕

文京区立指ヶ谷小学校	1
台東区立浅草小学校	5
杉並区立松ノ木小学校	8
東村山市立野火止小学校	12
狛江市立狛江第三小学校	16
多摩市立連光寺小学校	19

〔 中 学 校 〕

江戸川区立小岩第二中学校	23
--------------	----

〔 小 学 校 ・ 中 学 校 〕

板一中 小中一貫学びのエリア	27
----------------	----

〔 義 務 教 育 学 校 〕

八王子市立いずみの森義務教育学校	30
------------------	----

〔 高 等 学 校 〕

東京都立篠崎高等学校和太鼓部	33
----------------	----

ICT 教育の推進

文京区立指ヶ谷小学校

1 学校の概要

今年度、開校110周年を迎えた歴史と伝統のある学校である。都会とは思えぬほどの自然に恵まれた豊かな環境の中で、384名の児童が明るく楽しく学んでいる。

「よい社会を形成する人間をめざして 心豊かで輝く個性をもつ子供を育てる」を教育目標に、人間関係力の向上を図る教育を推進している。



2 教育活動実践の内容

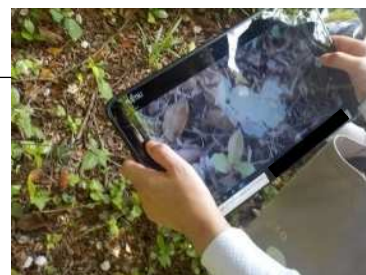
(1) 取組の背景

GIGA スクール構想により1人1台端末が配布された。コロナ禍の中で児童の学習を保障するために、この1人1台端末の利活用は、喫緊の課題であった。しかしながら、どのように取り組んでいくのかについて、解決策が見出せない状況であった。そのような中で、本校では「とにかくやってみよう」という教員が多く、試行錯誤しながらではあったものの、活用することで解決策を見出していった。そのような取組が文京区教育研究奨励賞を受賞し、さらに文京区教育研究協力校として指定されることになり、研究に取り組んだ。

(2) 教科における ICT 活用の例

ア 3年生 総合的な学習

- 1 単元名 白山の町たんけん
- 2 ICT 活用のねらい
 - ・観察したものを観察記録として発表するため。
- 3 活用方法
 - ・カメラで撮って、発表の際に写真を使う。
- 4 指導の流れ
 - ① 観察して見付けた『春』と感じる様子を写真に撮る。
 - ② オクリンクに気付いたこと、植物・動物の特徴を書き、写真をカード上に貼る。
 - ③ 友達の観察カードを見合って共有する。
 - ④ 観察して気付いたことを発表する。



イ 4年生 算数

- 1 単元名 小数のかけ算とわり算を考えよう
- 2 ICT 活用のねらい
 - ・数直線をかいて、立式するため。
 - ・自分の考えを図式化して、友達に伝える手段にするため。
- 3 活用方法
 - ・ムーブノート上のワークシートにある数直線図を操作させることで、小数のかけ算・わり算の計算の意味やその結果について考える際の手立てにしていく。
- 4 指導の流れ
 - ① 問題を把握し、計画を立てる。
 - ② タブレット上で数直線を作成し立式する。
 - ③ 友達と数直線を見せ合いながら計算の仕方を交流する。全体で話し合う。

ウ 6年生 音楽

- 1 題材名 リズムアンサンブルをつくろう
- 2 ICT活用のねらい
 - ・音楽づくりの活動に対して興味をもって取り組めるようにするため。
 - ・自分のつくったリズムをすぐに聴き、試行錯誤ができるようにするため。
- 3 活用方法
 - ・音楽アプリ「Chrome Music Lab」の「Song Maker」を使って、リズムパターンをつくる。
 - ・他の児童のつくったパターンを共有し、アイデアを深める。
- 4 指導の流れ
 - ① 1人1台端末を使って、8拍分のリズムパターンをつくる。
 - ② つくったリズムパターンに合う打楽器を選択する。
 - ③ リズムパターンの終わり方を演奏しながら考える。
 - ④ ペアごとに発表し、演奏を聴き合う。

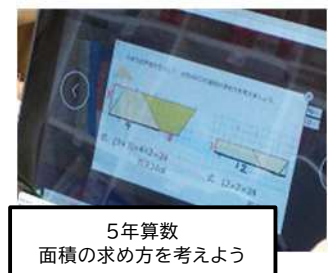
(3) 教科以外での活用

ア 学校間交流

近隣の小中学校と Teams を活用してオンライン交流を実施した。他校の児童・生徒とテーマ（学校の好きなところクイズ、地域紹介等）をもって交流することで、知識を共有したり、新しい発見をしたりしながら、自分自身の視野や考えを広げることができた。また、外に開かれていく学習を体感できたと同時に、相手の考えを知ることで、違いを受け止め、認めることもできた。

イ デジタル教科書の活用

令和4年度に外国語と国語、令和5年度に算数の学習者用デジタル教科書が高学年に導入された。例えば、国語では、本文に線を引いたり、必要な部分をWeb上のノートに抜き出したりといったデジタルならではの活動を行った。算数では、図形の学習等において画面上で様々な操作を手軽に行い、自分の考えを表現していた。



ウ スタディ・ログ活用

既習事項の確認の学習などの時に、算数科を中心に継続して行った。結果が自動的に作成されるミライシードの「カルテ」を閲覧することで、児童の学習状況や到達度具合を把握し、個別指導を充実させたり、授業改善を図れるようにしたりした。

児童の学習成果物（文章作成ソフトや発表資料作成ソフトで作成したもの）をデスクトップに整理して保管（マイヒストリーBOX）し、時折振り返らせることで、自身の成長を感じられるようにした。

(4) 日常的な取組

ア ICTガイドラインの作成

当初は、1人1台端末使用のルールについて作成した。それに加えていく形で改善を図り、令和4年度には、児童が当該学年においてどのようなICTスキルを身に付けていくの

学年	教科	活用	活用	活用
1人1台端末活用	国語	① 教科書の本文に線を引いたり、必要な部分をWeb上のノートに抜き出したりといったデジタルならではの活動を行った。	② 教科書の本文に線を引いたり、必要な部分をWeb上のノートに抜き出したりといったデジタルならではの活動を行った。	③ 教科書の本文に線を引いたり、必要な部分をWeb上のノートに抜き出したりといったデジタルならではの活動を行った。
	算数	① 図形の学習等において画面上で様々な操作を手軽に行い、自分の考えを表現していた。	② 図形の学習等において画面上で様々な操作を手軽に行い、自分の考えを表現していた。	③ 図形の学習等において画面上で様々な操作を手軽に行い、自分の考えを表現していた。
基礎的学力	国語	① 教科書の本文に線を引いたり、必要な部分をWeb上のノートに抜き出したりといったデジタルならではの活動を行った。	② 教科書の本文に線を引いたり、必要な部分をWeb上のノートに抜き出したりといったデジタルならではの活動を行った。	③ 教科書の本文に線を引いたり、必要な部分をWeb上のノートに抜き出したりといったデジタルならではの活動を行った。
	算数	① 図形の学習等において画面上で様々な操作を手軽に行い、自分の考えを表現していた。	② 図形の学習等において画面上で様々な操作を手軽に行い、自分の考えを表現していた。	③ 図形の学習等において画面上で様々な操作を手軽に行い、自分の考えを表現していた。

かをイメージし、そのゴールに到達するためのガイドラインを作成した。令和5年度には、今自分ができていることやこれから必要な力についての児童の意見を反映し、修正・改善した。毎年児童の意見を聞き、更新している。

イ 相互研修

教員が相互に講師となり、自分が獲得した ICT スキルを学び合う取組である。当初は、オンライン授業の進め方や、初歩的なアプリの使用方法などを研修して全体的なボトムアップを図った。その後わずかな時間でも継続していくことで、研修内容も多彩になり、教員の情報活用能力が飛躍的に向上した。特に、日進月歩で登場する様々なアプリの使用説明会や自身の実践を記録シートにまとめ交流し合う研修は効果的であった。

ウ ICT 週間

ICT 週間では、年度ごとに「児童が自分の学習の目的のために、タブレットを上手に使うことができる」等の目標を掲げ、デジタル・シティズンシップ教育を行ってきた。目標達成のために、1学期は「知る・考える」、2学期は「実践・振り返り①」、3学期は「実践・振り返り②」という手順で手立てを講じてきた。

知る・考える	実践・振り返り①	実践・振り返り②
<ul style="list-style-type: none"> ・さすがやタブレットルールの確認。 ・1人1台端末が配布された背景の確認。 ・タブレットルールをよりよくするためのアイデアを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期に考えた「1人1台端末を利活用することができる授業」を実践する。 ・実践をもとに、2学期に向けて振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期の振り返り内容をもとに、1人1台端末を利活用することができる授業を実践する。 ・実践をもとに、来年度に向けて振り返りをする。

あわせて、ICT 週間には、「タイピングコンテスト」を実施した。児童の習熟度によって「練習」「特訓」「腕試し」を選択できる。また、児童が自分たちで自己選択してタイピングの練習ができるようになっているアプリも使用した。その結果、児童のアンケートでは、タイピングの技能が向上したと答える児童が多かった。

3 まとめと今後の課題（展望）

(1) 児童について

自己選択・自己決定的な学習を繰り返し経験したことにより自分なりの「学び方」を獲得し始め、「自らの考えで学ぶ子」という本校が目指した児童像に近付いてきている。

今後は、「自らの考えで学ぶ子」の実現に向け、児童主体の学習展開をさらに追究していく。そのために、自己選択・自己決定できる学習を今以上に取り入れたり、児童自身が学習の効果を考えたりできるよう、「学び方」を工夫していく。

(2) 教員について

相互研修を核に、1人1台端末等を効果的に利活用した授業改善に取り組んだ。その結果、今までの授業の在り方について見直し、教員同士で学び合うことが増えた。

今後は本校が目指す教師像「授業革命に挑む教師」をさらに実現していく。そのためには児童の実態を的確にとらえ、個にあった授業を【構想➡実践➡振り返り】しながら、授業改

善を超えた、授業革命に挑み続けていくことが重要と考える。

1 学校の概要

本校は、明治6年5月、第五中学区第二番公立小学「並木学校」として開校した。以来長きにわたり、この地で地域と共に歴史を刻み続けてきた。大正12年の関東大震災では、校舎を焼失し、浅草の町は瓦礫の山となった。しかし、すぐに浅草寺観音堂裏庭で露天学校が始まり、その後は伝法院や浅草神社を借りて授業が再開された。また、昭和20年3月の東京大空襲では、浅草の町は火の海と化した。学校にいた教職員と地域の方々の夜を徹した消火活動により、焼失を免れた。苦しく、困難な時代を乗り越えたからこそ、浅草小学校の今がある。

現在は、創立152周年を迎え、台東区内の小学校では一番歴史のある学校となっている。シンボルマークはトンガリ帽子の時計台で、玄関のステンドグラスや校庭正面の大きな壁画には、四季折々の浅草の風物詩や行事が描かれている。学校経営方針に「Well-Being（幸せ）の実現を目指して ～子供と近い学校～」を位置づけ、たくましく心優しい子供たちの育成に努めている。そして、これからも地域と学校が一体となった教育活動を進めていく。



2 教育活動実践の内容

浅草神社、雷門等、浅草の名所を学区にもつ本校は、地域行事が大変盛んであり、人の出入りも活発である。そこで、本校では、地域の実態を踏まえ、「地域で学ぶ体験学習」を大切にしている。多様な体験学習を進めているが、ここでは、3つの実践について以下に述べる。

(1) 帰宅困難者及び外国人観光客対応訓練への参加

インバウンド需要などにより、多数の外国人観光・買物客が集まる浅草寺・仲見世周辺地域において、災害発生時の混乱防止を目的とした訓練が行われている。これは地域と行政が一体となった帰宅困難者等に対する安全・安心な街「浅草」の普及啓発を図るものである。また、地震への備えについて関心が高まる中、浅草寺本堂裏に防災体験コーナーを設備し、来場者の防災意識向上を促すために実施されている。

小学生も実際に訓練へ参加し、防災意識を高めている。また、帰宅困難者への案内も実体験し、子供でも地域のために活動できる体験を積んでいる。このことが、未来の浅草の担い手となる素地をつくり上げている。

(2) 浅草神社例大祭「三社祭」への参加

約1400年前、隅田川より聖観世音菩薩の尊像を救い上げ、その尊像を祀るべく土師真中知命・檜前浜成命・檜前武成命の三神を御祭神とする浅草神社の御祭礼が始まった。現在の三社祭である。本校では、この祭礼の伝統をつなぐべく、「地域文化を学ぶ集会」「神輿組み上げ見学」「子供神

奥町内渡御」に参加している。

ア 地域文化を学ぶ集会

- ・三社祭とお囃子について学び、知識を深める
- ・地域行事に親しみ、地域を愛する心情を育てる

○集会委員会によるはじめの言葉

○学校長・PTA 会長の話

○三社祭 動画映像の視聴

○地域代表者 川角顧問による三社祭の由来

○馬道一丁目町会「あかざ連」のみなさんによるお囃子体験



イ 神輿組み上げ見学

・令和7年5月16日（金） 2校時～4校時

○ 9：30 地域文化を学ぶ集会、神輿 校庭へ組み上げ準備

○ 9：55 神輿組み上げ・見学準備 ※ 各学年15分間

○10：00 1年生見学 10：20 3年生見学

○10：40 2年生見学 11：00 5年生見学

○11：20 4年生見学 11：40 6年生見学

○12：00 6年生全員による大人神輿校庭渡御

○12：15 終了 神輿を花川戸一丁目町会へ

ウ 子供神輿町内渡御

・令和7年5月17日（土）

○ 9：00 着替え、トイレ（社教&2F） ○ 9：15 班編成確認

○ 9：30 「わっしょい」声出し

6年生：みんなで力を合わせるために、御神輿を担ぐときに、「わっしょい！」と大きな声で言いましょう。

5年生：今から、私たちと一緒に大きな声で「わっしょい！」と声を出す練習をします。全員立ってください。

6年生：私たちの後に続いてください。「わっしょい！」

全員：「わっしょい！！！！」 ～3回繰り返す～

○ 9：50 学校出発 ○10：15 神輿発進

○10：35 浅草神社観音裏到着 ○14：30 学校到着

(3) 浅草小学校スクールバンド・台東区ジュニアオーケストラ

本校は、音楽設備が充実しており、台東区在住の小学校4年生から中学生までが毎週台東区ジュニアオーケストラの団員として活動している。また、アンサンブル部として、高校卒業後もその活動は継続している。浅草小学校では、その充実した設備を活用し、浅草小学校スクールバンドとして、保護者・地域と連携した音楽活動を推進している。ここでは、スクールバンドの活動概要について述べる。

ア 浅草小学校スクールバンド

- ・スクールバンドの活動を通して音楽の
美しさ、素晴らしさを体得する。
- ・みんなと協力して一つのことを創り上
げることを学ぶ。
- ・粘り強く続ける気持ちを育てる。

地域協力者として、7名の講師の先生方
のお力をお借りし練習を充実させている。



【朝の練習】 月曜日から金曜日 土曜授業日

7時15分から30分 登校（登校したら教室に荷物を置き、すぐに音楽室へ）

7時30分から8時10分 練習（パート練習、全体練習など）

【休み時間の練習】自分の技能を高めるため、音楽室で自主的に練習できる。ただし、教員がいないと
きにはできない。

【放課後の練習】 定期的にパート、全体で行う。また外部講師による講習会を行う。

【練習の心得】

- ・遅刻をしないこと。・登校したらすぐに音楽室へ、そして練習すること。
- ・楽器を大切に扱い、終了後は手入れをすること。・はじめをつけ、集中すること。
- ・だれとでもなかよく、がんばって練習すること。・レッスン室の片づけをすること。

3 まとめと今後の展望

浅草小学校は、地域と共に歩む教育活動を大切に、積み上げてきた。今回、「地域で学ぶ体験学習」について述べたが、他にも「東京リバーサイド学園との交流」「浅草サンバカーニバルへの出場」「フィールドワーク」「羽子板市参観」等、地域に根付いた体験学習が目白押しである。台東区学校教育ビジョンの育てたい人間像の1番には「まちを愛し、人を愛し、他とのかかわりの中で自分を大切にする人」とある。本校は、その人間像へ向けた取組を推進していると同時に、未来へむけた「つながり」を考えていかなければならない。校長をはじめ、教職員は時期が来たら他の場所へ移っていく。しかし、浅草の地域はこの地で伝統をつないでいく。私たち学校職員は、この「地域で学ぶ体験学習」を丁寧につなぎ、バトンを渡していかなければならないと考えている。

一人一人が夢中になれる学びのデザイン
～深い思考を育む個別最適で協働的な授業の創造～

杉並区立松ノ木小学校

1 学校の概要

本校は、東京都杉並区の南西部、都立和田堀公園に囲まれた緑豊かな住宅地に位置している。昭和32年(1957年)の開校以来、地域との強い絆のもとで、特色ある学校文化を育んできた。令和7年度現在、児童数は340名、学級数は12、教職員数は30名である。

また、本校は特別支援教室の拠点校として、個別支援を必要とする児童への対応にも力を注いでいる。令和6年度からは、杉並区教育委員会の教育課題研究指定校として「教育DX」をテーマに研究を推進し、ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現をめざした授業改善に取り組んでいる。この研究の中核には、「協創の文化」の醸成がある。東京都教育委員会が提唱する教育ビジョンを踏まえ、組織的な校内研修と日常的な対話を通して、全教員が実践の担い手となる体制づくりを進めている。



2 教育活動実践の内容

本校では、従来の一斉指導型授業からの転換を図り、児童が自ら問いをもち、探究的に学ぶ「夢中になれる学び」の創出に取り組んでいる。令和6年度は、すべての教員がこの方針のもと、日々の授業実践を積み重ねてきた。

特に、授業構造を「複線型」に再設計し、児童の自己調整学習を支援することで、学びそのものが喜びにつながる授業づくりを推進している。また、「①問いの明確化」「②情報の収集」「③整理・分析」「④可視化」「⑤共同化」の5つの視点を柱とし、ICTを学習の基盤として活用しながら、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現をめざしている。



本校の授業づくりでは、児童の発達段階に応じた系統的な学びの構築を重視している。低学年では、「学ぶことの楽しさ」や「自分で考え、やってみるの喜び」を学びの出発点とし、観察・体験・表現を通じて、学びへの関心と基礎的なスキル（調べる・伝える・比べる等）を育てている。これが、中学年における「学びに向かう姿勢と方法の確立」へとつながる重要な土台となる。

中学年では、「問いをもち、調べ、考え、表現し、共有する」という一連の学習プロセスを児童自身の手で構築していく段階に入る。この時期、児童は学び方を身につけ、学びに向かう姿勢を内面化していく。「自分で学ぶ力」の形成は、高学年での多様な情報の活用や、複数の視点を統合する高度な思考活動へと発展する基盤となる。

こうして、低学年から高学年までの学びの連続性を見通しながら、教師は児童の学びを深め、加速させる「促進者」としての役割を果たすことが求められる。

特に中・高学年においては、教科固有の「見方・考え方」に基づいた問い返しや、教材の深い解釈に基づく児童理解を踏まえた助言が、学びの質を大きく左右する。情報提供や正答の提示にとどまらず、「もう一歩考えてみよう」「別の見方はできないか」といった働きかけを通じて、児童の探究を促進し、思考の幅と深さを広げている。

(1) 低学年の実践 ～「学びの楽しさ」を起点とした土台づくり～

低学年では、学ぶことの楽しさや、自分で考え試す喜びを出発点として、観察・体験・表現などの活動を通じて「調べる」「伝える」「比べる」といった基本的な学びの方法が自然に身につくよう支援を行った。こうした経験は、中学年以降の学びに向かう姿勢の確立につながる土台となった。

教師は、児童が「なぜ?」「どうして?」と自ら問いを生み出せるよう、環境づくりに力を入れた。算数では「均等に分ける」ことの意味を考える活動を行い、生活科では朝顔の種をどう配るかを話し合う中で、児童たちの思いや工夫を引き出した。

情報収集においては、「文字を読む」だけでなく、「見て・聞いて・感じる」体験も重視し、教師が視点や目的を明確に示すことで、情報を選ぶ力を育てた。国語のクイズ作りでは相手意識をもち、生活科では受け手に伝わる説明を考えるよう促した。

思考の整理では、分類や比較などの基本的な型を体験的に取り入れた。国語では詩の工夫を要素ごとに整理し、生活科では自分の成長を多面的に捉えて図にまとめるなど、問いを通じて分析の入り口を経験させた。

学習のプロセスや目標を可視化するために、学びマップや図、掲示物、カードなどを活用し、「今どこにいるか」「次に何をするか」を明確にした。これにより、見通しをもって主体的に学ぶ姿が見られた。

また、他者との対話や協働を通じて「考えを共有することが学びになる」ことを実感できるよ

学びマップ「帰りの道」


学習課題 人物の視点や作品の構成に着目して読もう

1. 単元で身に付ける力

- 既習の構文や構図を把握し、その発展を察見することができる。
- 「構」と「果物」の視点的な構えとらえることができる。
- 比較や仮定など、表現の工夫を察見することができる。

2. 学習計画（全5段階）を達成することである。

	○学習活動	◎単元課題 (Seminar・discussion)	☆自己課題
1	○既習の構文を再読し、クラスで共有する。(シェアポイント) ○物語の基盤(一人称)を把握した後、学習計画を確認する。 ○感想の自由な発表を行う。 ○自分から得意な構文や構図を述べることが出来る。		
2	○「物語の整理」 ○登場人物の立場の中で自分が読んだ物語の構文をまとめる。 ○「構」と「果物」に合った構文のようにならせた構文。 ○「構」と「果物」に合った構文のようにならせた構文をまとめる。 ○自分の構文を整理し、発表し合うことができる。		
3	○構文を整理するための課題解決 ○「構」と「果物」の登場人物の立場の整理と、その構文とは、 ○「構」と「果物」の「構文」や「果物」に合った構文。どんな構文を整理しているか。 ○「構」から見た「果物」と「果物」から見た「構」の人物像を整理する。 ○自分の構文を整理し、発表し合うことができる。		
4	○「構」と「果物」に合った構文をまとめる。 ○「構」と「果物」に合った構文をまとめる。 ○自分の構文を整理し、発表し合うことができる。		
5	○自分の構文を整理し、発表し合うことができる。 ○自分の構文を整理し、発表し合うことができる。		



帰りの道

学習マップシートでもノートでもOK！自己課題です。

うにした。クイズ作りや算数の活動では意見を出し合い、対話を促す言葉を取り入れることで、自然なやりとりが生まれた。

(2) 中・高学年の実践 ～「学び方を自ら構築し、問いを深める段階へ」～

中学年では、「問いをもち、調べ、考え、表現し、共有する」という学習プロセスを児童自身が構築することを目指し、学びに向かう姿勢と方法の確立に取り組んだ。高学年では、これまでに培ったスキルを活かし、抽象的で論理的な思考や複数の視点を統合する深い探究へと発展させていった。

教師は、「教える存在」から「問いに伴走する存在」へと役割を転換し、児童の思考を促す助言や環境づくりに注力した。社会科では、身の回りの出来事と関連づけて疑問を深める設計を行い、算数では「なぜそうなるのか」といった謎を軸に探究心を引き出した。

情報収集では、教科書や資料に加え、インターネットや地域の声など多様な情報源を活用した。情報の信頼性を見極める力や、問いに即した情報を正確に取り出す力の育成を図り、教師は誤解や偏りへの即時対応で児童の判断を支えた。

思考の整理・分析では、教科固有の「見方・考え方（シンキングレンズ）」を活用した。社会科では時間や空間の視点から、理科では変化や構造の観点から考察し、児童は因果関係や本質に迫る思考を体得していった。教師は視点の明示や分類方法の示唆を通して、思考の抽象化を支援した。

学習の可視化においては、「学びマップ」や「シンキングサイクル」を活用し、児童が単元全体の流れや現在位置、次に必要なことを把握できるようにした。これにより、児童は自ら学びを調整でき、教師も適切なタイミングで支援を行うことができた。

学びの共同化では、対面とデジタルの両面から対話の機会を設けた。Microsoft Teamsなどのツールを使った記録可能なチャットや共有ドキュメントにより、発言に自信がない児童も参加しやすい環境を整えた。算数では、円卓ボードを用いたロールプレイ活動を通じて、教え合いや伝え合いによる思考の深化を促した。

こうした実践を通じて、教室には児童の集中・没頭・対話が自然に生まれ、「秩序ある自由」の中で、児童たちは学びの主人公として、自らの問いを追いながら他者とつながり、より深い理解へと歩みを進めていった。

3 まとめと今後の課題（展望）

(1) 児童の変容

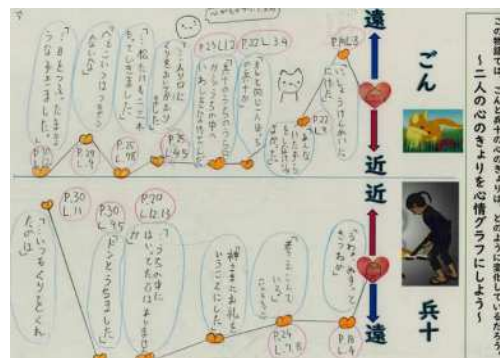
児童は、自らの問いをもって学びに取り組み、仲間と対話しながら学びを深めていく姿勢が定着しつつある。どの授業においても没頭と集中が見られ、教師による生活指導的な声かけが不要となる場面が増えている。探究の中で児童が学びを自分の



ものとして再構成し、自己評価を行う姿が日常的に確認されている。

(2) 教職員の変容

教職員にも大きな変容が見られた。「教える存在」から「児童の問いに伴走する存在」へと意識が転換し、授業づくりへの意欲と創造性が高まっている。「教室で起こる学び」を共に楽しみ、共有する文化が校内に広がっている。DX 通信を活用した実践の可視化と共有が、若手・中堅・ベテランの垣根を越えた相互成長を支えている。



(3) 今後の課題（展望）

令和7年度は、教職員の半数近くが新たに異動してきたことにより、これまでの実践の継続性と共有の再構築が大きな課題となっている。本校が目指す「夢中になれる学び」を、異動してきた教員一人一人が実践者として再び立ち上げていくためには、実践記録の蓄積とモデル化、校内研修の体系化、授業観の言語化といった仕組みづくりが求められる。

その実現には、日常的な対話の機会の確保と、授業づくりに関する相互の省察を通じた学び合いの文化の醸成が不可欠である。

今後は、これらの取組を通して、学校全体で「夢中になれる学び」を持続的に実現できる環境づくりを進めていくとともに、教育 DX 時代にふさわしい授業づくりと組織づくりの両輪を支えるモデル校としての責務を果たすべく、実践の再現性と波及性の高い教育モデルの構築を目指していく。

DX 通信

松ノ木小学校
R6年度
4月7日(日)
第1号

この冊子は、ごんと兵十の心遣いは、どのような形にしているだろうか？
二人の心のきよりを心情グラフにしよう！

DX 通信
よろしくお願ひします

今週からいよいよ授業がはじまります。今年度、授業DXの担当になりました、吉川です。
今年度、新たな学びが始まる松ノ木小学校において、(大変恐縮ですが)昨年度から実践してきたことを少しでもみなさんに還元していくことが、自分の役割だと思っています。
研究推進と連動しながら、主に授業のことについての発信をさせていただきます。授業のことでの、より具体的に、分かりやすい発信をすることを目標にしたいと考えています。
どうしても自分からの発信が多くなってしまいますが、自分も勉強中ですので、あくまで、みなさんと高め合っていくこと、積極型授業とは何なのかを追究していければと思っています。よろしくお願ひします。

授業の見方

項目	見方	見方	見方
①
②
③

第1週の授業を作りました。3つの見方があります。

(未表示)
青は、一言指導授業です。(従来型です)

(◎がついているもの)
黄は、課題提示を子供から始める完全積極型授業です

(○がついているもの)
赤は、課題提示を教師から示す不完全積極型授業です。

※◎と○のちがいは、いつか全体会で注目させていただきます。

基本的に、◎が多く、徐々に○がふえていくはずですが、

今後、自分の担当する、国、算、理、社、道徳、学活で公開させていただきます。

宜しくお願いします

あくまで予想です。こんなにスムーズに稼働するはずはないので、遠征は即時、ご確認ください。(なんだ、やっとなじりやな！)となってしまうかも知れません。

DX 通信

松ノ木小学校 吉川
R6年度
1月14日(火)
第35号

この冊子は、ごんと兵十の心遣いは、どのような形にしているだろうか？
二人の心のきよりを心情グラフにしよう！

DX 通信
自信をもって
さらに自走を進める為に

困った時に閲覧できるよう、リング綴じのカードを用意しています。

探究の技1 (情報の取捨)

教科書・資料集 Google検索 動画視聴 図書館資料 新聞記事

探究の技2 (情報の整理分析)

A B C D E F G H I J K L

探究の技3 (家との)

① 今やこれまでに学びとつながる
② たとえば、つまりとつながる
③ 問い(?)と答えとつながる

社会の見方

空間のつながり 時間のつながり 人・物のつながり

リングタイプにすることで、内容を更新していくこともできます

研究主題「自他を大切にしたいや考えを豊かに表現できる力の育成～出会う、学ぶ、変わる 『野火止ビジョン』の実践を通して～」における人権教育の推進及び普及・啓発

東村山市立野火止小学校

1 学校の概要

昭和44年開校 13学級 360名

- 令和5年度は、東京都教育委員会人権尊重教育推進校の指定を受け、研究主題を「自他を大切にしたいや考えを豊かに表現できる力の育成」と設定し、研究を始動した。研究1年目は副主題を「地域の学習材を生かした体験的な学習を通して」とし、地域の人材や教材を活用した体験的学習を中心に人権教育の授業実践を行った。
- 令和6年度の研究2年目は、副主題を「出会う、学ぶ、変わる『野火止ビジョン』の実践を通して」とし、人権課題に対する学びのモデルを中心に個別視点と普遍的な視点から授業実践を積み重ねた。2年間で計12回の授業研究や人権教育に関わる多くの実践を行ったことで、当該校の児童の中に自他を大切にしたいや心情、偏見や差別を許さない心情が着実に育った。
- 令和7年1月23日には、令和5・6年度東京都教育委員会人権尊重教育推進校として、全学年学級（12学級）の授業公開を行い、研究成果を発表した。
- 令和7年度の教育課程においては、人権尊重教育推進校としての取組の更なる充実に向け、「野火止ビジョン」を見直し、特に、児童が人権課題に対して学習を行っていく中で、学習者の思いや願いを大切にしたいや学習課題の設定や自らの変容をもとに、周りの人や社会へ働きかける学習活動「広げる」を検討し、授業実践を行っている。



2 教育活動実践の内容

- (1) 研究主題 「自他を大切にしたいや考えを豊かに表現できる力の育成
～出会う、学ぶ、変わる 『野火止ビジョン』の実践を通して～」
- (2) 研究仮説
学びの対象への効果的な出会いを設定し、児童の学びを深めていくことで、児童の考え方や周りへの関わり方が変わり、自他を大切にしたいや、多様な人々と共に生きようとする心情を育てることができることを考え、研究仮説とした。
- (3) 目指す児童像の設定
低学年…友達との関わりを通して、よりよい自分の行動を知ることができる児童
中学年…他者との関わり方について考えることを通して、自分の行動に生かすことができる児童
高学年…社会や他者に対しての関わり方について考えることを通して、自分の生き方を見つめ直すことができる児童

(4) 研究実践の内容

ア 人権課題に対する学びのモデル「野火止ビジョン」を通じた授業改善

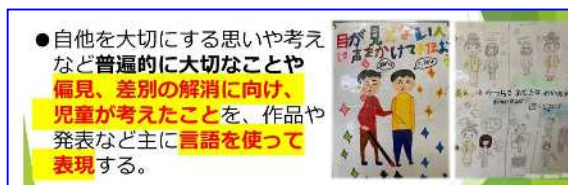
個別的な視点からの取組を中心に【出会う】(地域在住、在勤の高齢者、障害者、外国人、ハンセン病回復者の方々や多くのゲストティーチャーの方々との交流、効果的な教材提示などを通して、児童に様々な人々への親しみを感じさせる)【学ぶ】(人々が社会の中で直面している人権課題に気づき、その解消に向けて自分たちができることを考える)【変わる】学んだことをもとに、児童が自分自身や他者、社会に対して新たに獲得した考えを言語、ポスター、タブレットなど様々な方法で表現する)という学習の見通しを「野火止ビジョン」と命名し、授業研究を中心にして指導法の改善に努めた。

イ 日々の授業の中で行う人権教育の実施

各教科等のねらいに向けた「人権教育の視点」及び「人権教育の留意点」を適切に設定し、実践した。

ウ 児童が自分の思いや考えを豊かに表現する活動の実施

- ・授業や取組の後の振り返り
ポスター、標語等の作成
- ・「ことばのプレゼント」での交流
- ・他学級、異学年への発表



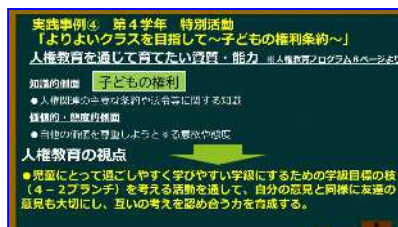
エ 自他を大切にしたい思いや考えの素地を育む日常的な学習の実施

- ・きれいなことばときれいなこころ運動
学級ごとの標語作成や代表委員会児童による児童から集めたきれいなことば短冊の作成及び掲示、教員による名文にふれる朗読動画作成
- ・オレンジ班活動(縦割り班)
- ・挨拶運動
- ・「人権の花」の取組
- ・全校ボッチャ体験
- ・「のりこおかあさん」の活用
- ・はるかひまわり絆プロジェクト など



オ 自分たちが「権利の保有者」であることを考える学習の実施

- ・こどもの権利条約の正しい理解
- ・児童が意見表明する場の設定
- ・「人権がもっとわかる本」
(東京都人権啓発センター発行)の活用



カ 個別の人権課題について学ぶ学習地域・関係機関との連携

第3学年【高齢者】

- ・地域高齢者サークル、東村山老人クラブ連合会事務局

第4学年【障害者】

- ・東村山市ボランティアセンター、東村山市福祉協議会、障害のある方

第5学年【外国人】

- ・通訳ボランティア、東村山地球市民クラブ所属の外国人
- 第6学年【HIV感染者・ハンセン病患者等】
- ・国立療養所多磨全生園、国立ハンセン病資料館、ハンセン病回復者

(5) 研究内容の発信

- ア 当該校校長は、令和6年7月25日に東京教育委員会主催の「令和6年度 第2回人権尊重教育推進校委員会及び第2回人権教育研究指定校連絡会」にて、各自自治体の指導主事及び対象教員に向けて、研究経過を発表した。
- イ 当該校は、令和7年1月23日に研究発表会を開催し、東京都に研究成果を発表した。
- ウ 当該校校長は、市内の校長会、副校長会にて、研究の概要の説明を行い、周知した。
- エ 当該校研究主任は、東村山市教育委員会主催の人権教育推進委員会にて、令和5・6年度における本研究の成果及び令和7年度の取組状況について周知した。

(6) 実践指導例

ア 個別的な視点からの取組

第6学年 総合的な学習の時間

「自分大好きみんな大好きプロジェクト」【HIV感染者・ハンセン病患者等】

目標：ハンセン病に関する歴史や現状、課題について追究する活動を通して、ハンセン病について正しい知識を身に付けるとともに、偏見や差別なく互いの人権を尊重しながら共に生きていくために必要なことを考え、自分のこれからの生活に生かそうとする。

人権教育の視点

児童自身が解決したい課題を決め、課題解決に向けて、自己の生き方と照らし合わせながら学習することを通して、ハンセン病に関わる人権侵害等の歴史や現状などについて、正しい知識を身に付けるとともに、偏見や差別なく互いの人権を尊重しながら共に生きていこうとする態度を育てる。

取組の概要

ゲストティーチャーの話や「のりこおかあさん」の活用、DVD等の視聴覚教材、ハンセン病資料館の見学等を通して、ハンセン病回復者やその家族に対する偏見や差別の歴史や実態など、ハンセン病問題に対する正しい知識を学んだ。その上で、偏見や差別が起きた原因やその解消に向けて自分たちにできることを考え、考えたことを資料にまとめ、下級生や地域の方に発表した。本校は、これまで近隣にある多磨全生園を活用し、学習を進めている。最高学年となり、児童は身近なところに差別があったこと、差別と闘っていた人々がいたことを実感し、その姿から今後の自分の生き方を深く考えようとする姿が見られた。

【平沢保治さんからのビデオメッセージ】



【学んだことの発表会】

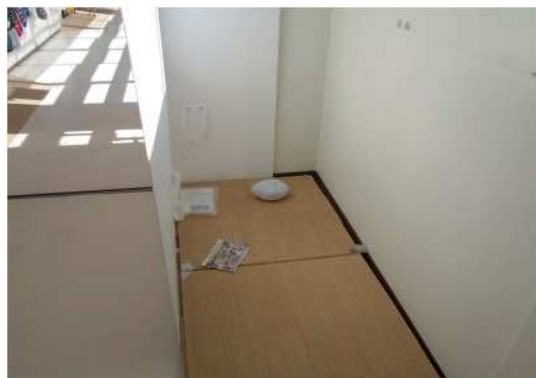


3 まとめと今後の課題（展望）

様々な人権課題や「子どもの権利条約」を取り上げた実践の中で、自他を大切にしている心情や偏見や差別を許さない心情を、言語やポスターなど様々な方法で表現してきたことで、児童の他者との関わりにおいて、自分や相手を大切にしようとする心情が育ってきた。

今後は、児童にとっての人権課題へのよりよい出会わせ方や学ばせ方、地域参画の視点を工夫するなど、「野火止ビジョン」をさらに充実させて授業の質を高めていく。

多様な子どもたちがいることを前提とした
インクルーシブな学校づくり



狛江市立狛江第三小学校

▲MYプロジェクトにより設置した
クールダウンスペース

1 学校の概要

狛江市立狛江第三小学校は、昭和32年に開校し、令和9年度に70周年を迎える。現在は特別支援学級を含め23学級、約640名の児童が在籍する中規模学校として、地域の教育を支えている。

本校は自閉症・情緒障がい特別支援学級（あおば学級）及び拠点校として特別支援教室（ひまわり教室）が設置されている。また、令和3・4年度には文部科学省の「特別支援教育に関する実践研究充実事業」において、「知的障害に対する通級による指導についての実践研究」を行う等、特別支援教育の充実に努めてきた。令和6・7年度は狛江市教育研究奨励校として、研究主題を「自立的に学び続ける児童の育成～仲間と共に学びを深める学習の充実～」を設定し、児童一人ひとりの学びの充実に向けた研究を推進している。

2 教育活動実践の内容

本校は、令和3・4年度における文部科学省実践事業後の令和5年度以降も、一般社団法人UNIVAと連携を図りながら、例えば児童一人ひとりの状況に応じた多様な学び、授業のユニバーサルデザイン化、通常の学級における特別支援教育に関する相互理解教育、社会モデルの視点で考える授業の開発等に取り組んできている。このように、全学級において特別支援教育を視点とした教育活動を推進することで、誰一人取り残されず、全ての児童の可能性を引き出す教育を展開している。

(1) 取組概要

ア 校内研究（研修）

本校は令和4年度から校内研究の分科会として「特別支援分科会」を設置している。今年度も研究主題を「自立的に学び続ける児童の育成～仲間と共に学びを深める学習の充実～」と設定し、研究を推進している。その土台として、「特別支援分科会」を中心にインクルーシブな教育の取組を実現することで、児童が一人ひとりの多様性を認め合い、協働しながら学ぶ姿勢を育めるようにする研究及び研修を実施している。更に、一般社団法人UNIVA理事 野口晃菜氏の講演の他、次頁イとの関連を図りながら、より教員及び児童のニーズに応じた実践共有、協議等を実施し、インクルーシブな学校づくりの具現化を図っている。

イ インクルーシブ有志の会

(ア) 概要

令和3・4年度の文部科学省実践研究充実事業終了後の令和5年度、教職員間において「インクルーシブ教育システムやユニバーサルデザインの授業等への理解を引き続き深めたい」との意見があり、自主的な研修（インクルーシブ有志の会）が立ち上がった。

(イ) 目的

- a インクルーシブな学校づくりのための取組及び校内研究（研修）の企画・推進を図ること
- b 教員が自らのアイデアの具現化を図るための相談及び報告の場として、一人ひとりの取組意欲の向上やスキルアップを図ること

(ウ) 形式

本会は、休憩時間を活用した自主研修であるため、参加・不参加、出入り自由等、自らの職務、私生活等を考慮した無理のない参加をすることについて共通理解を徹底した。併せて、ワールドカフェ形式のリラックスした雰囲気の中で、自由な対話を行う等、参加者が自らの願いや思いを表出しやすいようにした。また、参加できなかった教員についても、毎回の記録を Microsoft Sway で共有したことで、次の回に気兼ねなく参加できるようにしている。



▲有志の会の様子

(エ) 経過等


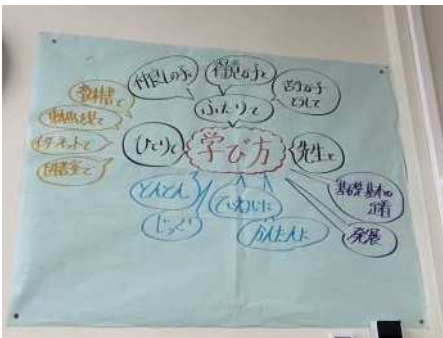
【令和5年度】

回	日時	内容
第1回	5月26日（金）	「キックオフ会」の実施（趣旨説明、自己紹介等）
第2回	6月9日（金）	①校内研修の取組内容の検討 ②今年度取り組みたいことについての話し合い
第3回	6月30日（金）	MYプロジェクト※の話し合い
第4回	9月22日（金）	MYプロジェクトの進捗状況の報告
第5回	10月27日（金）	日頃の悩みや気付き、喜び等を共有するフリートーク
第6回	11月10日（金）	日頃の悩みやMYプロジェクトの進捗状況等についての意見交換
第7回	11月30日（金）	3グループに分かれ、特別支援教育に関連するテーマ別に話し合い
第8回	2月8日（木）	3グループに分かれ、特別支援教育に関連するテーマ別に話し合い
第9回	3月12日（火）	今年度の取組の振り返り

※ MYプロジェクト…インクルーシブな教育関連で取り組みたいこと

【令和6年度】

インクルーシブ有志の会は、令和5年度の機能は維持しつつ、「社会モデル授業開発プロジェクト」及び「授業のインクルーシブ化プロジェクト」に分かれ、校内研修とより関連させながら活動を広げた。

社会モデル授業開発プロジェクト	授業のインクルーシブ化プロジェクト
<p>他自治体の学校との情報交換・協議等を行いながら、児童自身が社会モデルの理解を深め、自分事として捉えられるような授業を開発し、実践した。</p> <p>学年：第6学年 教科等：総合的な学習の時間 授業名：「あたりまえ」アップデート 授業時数：全3時間</p>  <p>▲上記授業の板書</p>	<p>他自治体の学校の視察及び授業実践の共有・検証等を通して、日々の授業における「多様な子どもたちがいることを前提としたインクルーシブな学校づくり」を具体的に推進した。</p>  <p>▲教員と児童で話し合って作成した、学び方についての掲示物</p>

3 まとめと今後の課題（展望）

(1) まとめ

前項2の取組の成果は以下のとおりである。

- ア 授業のインクルーシブ化が推進され、児童自身が自分に合った学習方法等を選択できる授業が増えている（個別最適な学びの推進）。
- イ 教員の児童理解が進み、児童に係る諸問題に対し、「厳しく叱る」のではなく、環境調整を含め、児童の特性に応じた柔軟な指導が展開されるようになった。
- ウ 児童の困り感等の児童理解の視点が増えるとともに、適切な支援を行うことができるようになり、教員の指導の幅を広げることができた。
- エ 教員及び児童の社会モデルへの理解が進み、誰にとっても住みやすい社会づくりの視点を得ることができ、共生社会の実現に向けた基礎を培うことができた。
- オ 特別支援教育に関する共通の認識が促進されたことで、特別支援教室及び自閉症・情緒障がい特別支援学級と、通常の学級との連携の質的向上が図られた。

(2) 今後の展望

本校の取組は、これまでも一般社団法人 UNIVA のイベントや、本市の地域特別支援教育推進連絡協議会等においてその実践の報告をしている。今後も本校の取組の充実を図るとともに、取組実践を他校にも広げていく。

主体的な発信・行動する力を育む教育活動の工夫
～アントレプレナーシップ教育の視点と共に～

多摩市立連光寺小学校

1 学校の概要

東京都多摩市立連光寺小学校は、多摩ニュータウン東端に位置する既存地区にあり、開校51年目を迎えています。多摩川や都立桜ヶ丘公園、明治天皇のお狩場であった聖蹟記念館、農業実践大学校、森林総合研究所など、地域環境資源に恵まれた立地です。「総合的な学習の時間」において、その地域環境資源を生かし「地域環境資源に根差した特色ある教育活動（郷土を重んじる学び）」を行ってきました。



2010年代になり、地球温暖化の進行と東日本大震災による福島第一原発の事故も重なり、世界の持続可能性が不安視され始めました。平成22年に多摩市がESDを教育施策の柱としたこともあり、本校の地域環境資源を生かした教育活動を「持続可能な社会づくりを目指した学び（ESD）」として進化・焦点化しました。

2015年に国連で採択されたSDGsは、持続可能な社会づくりに欠くことのできない目標であり、SDGsの教育活動の中での位置づけのモデルを実践する必要性がありました。これまでの本校の環境教育・ESDがどのようにSDGsに貢献しているのかを、授業における探究活動を進めた児童自身が意識し、振り返ることで、SDGsを検証のための一つのツールとして活用しながら学習を進めました。この取組が、自らの学びがどうSDGsに資するかを確かめること、すなわち「SDGsを達成する学び（郷土から世界へ）」へと発展しました。

2020年代も後半になり、地球温暖化や廃棄物問題、生物多様性の維持を考えた時に、これまで学校教育がとってきた消費者教育のスタンスでは十分な人材育成ができないことが明白となってきました。そこで、持続可能な社会づくりへの思いを持ち続け、意思決定できる人材を育成すべく、アントレプレナーシップ教育の要素を教育活動の視点として組み込み、指導カリキュラムの改善と実践、検証を行っています。

2 教育活動実践の内容

<1年生> 季節と友だち 生き物となかよし みんなニコニコだいさくせん

校庭や隣接する都立桜ヶ丘公園・市立大谷戸公園で、生き物や樹木、草花などに触れたり、栽培をしたり自然物を利用した作品づくりなど、自然の不思議さや自然遊びの楽しさに気付く活動をします。活動後には活動の様子の絵を描いたり、作文に書いたりしてまとめ、自分の思いや考えを伝え合います。季節の移り変わりを感じながら、学校の周りの自然を大切にしたい気持ちを育みます。

<2年生> もっともっとまちたんけん めざせやぎ・うさぎはかせ

地域の公園を中心に探検活動を行ったり、地域の人と交流したりする活動を通して、自分たちが地域の環境や人々と深く関わっていることに気づき、地域に親しみをもてるようにしています。後半は、「連光寺のすてきなことを伝えたい」という発信をします。地域への愛着をいっそう深めています。また、校内で飼育しているヤギとウサギに触れ合いながら調べ学習を進め、お世話をする中で他者の立場に立った接し方を体得していきます。



<3年生> めざせ！桜ヶ丘公園ガイド 多摩桜の丘学園の友だちとなかよくなろう

初めての総合的な学習の時間では、連光寺に欠かせない都立桜ヶ丘公園や市立大谷戸公園をフィールドとして、その歴史や自然と関わりながら「桜ヶ丘公園ガイドになろう」という学習を行っています。一人一人が桜ヶ丘公園についてのテーマを決め、探究学習の方法を学びながら深めていきます。最後に、自分たちに何ができるかを考えて発信します。また、都立多摩桜の丘学園とも交流し、インクルーシブとは何かについても学びを深めます。

<4年生> 川は自然の宝箱

身の回りにある水をたどり、大谷戸川の源流が乞田川、多摩川へとつながる事を確認し、専門家の方に調査方法を教えてもらい植物や野鳥の観察、水生生物や魚、岩石、ゴミについて探究学習を繰り返します。多摩川の上流(川崎大師河原)や下流(御岳山)にも総合見学として出かけます。課題ごとのグループで発見したことや考えたことなどはまとめて発表します。教科学習とも関連させ、多摩川の将来の姿について考えを深めています。



<5年生> 連光寺 SATOYAMA プロジェクト

学校近隣の里山で自然観察をしながら里山に関する知識を深めたり、谷戸田での稲作体験をしたりしながら個人課題を探り、探究活動を繰り返しながら、里山や環境についての考えを深めます。伐採した竹の炭焼き体験や森林教室などの学習も行い、自然と人間の生活との共生や環境保全についてまとめて発信します。

<6年生> 未来にやさしいエネルギー

地球温暖化の現状や原因を理解し、環境を守るために自分たちには何ができるのか考えます。持続可能な社会づくりを目指して、佐々間な発電方法を調べたり、見学に行ったりして体感して学びます。その中で再生可能エネルギーの可能性を自家発電を行って探り、

蓄電し、駅前でイルミネーションを灯します。SDGsについても学びながら、地震の学びと照らし合わせ、これからの社会の在り方について考えます。他校との交流や地域の催しに参加することを通して、自分たちの考えを発信し、環境を守るための意志をもちます。

3 まとめと今後の課題

本校のESDの取組を通じて、SDGsを学びの中に取り入れて生かしていくために学習内容とSDGsの十分な関連付けを行ったことに加え、学んだ事柄によって培った価値観によって児童自身の中に「自分が地球の役に立っている」「自分はこれでよいのだ」といった自己有用感や、自己肯定感を育むことにもつながりました。



しかし、次に私たちが直面したのは、自身の手で変えようのない現実でした。例えば6年生の取り組む「未来にやさしいエネルギー」。様々な発電方法の可否は学べても、実行できなければ机上の空論です。SDGsは実行が伴って初めて目標に近付くのです。持続可能な社会づくりを目指して、私たちはESDを進めてきました。従来のESDの取組が、次世代の人材育成に不可欠な取組であることに変わりはありません。けれども、現状を正視すると、それだけで教育の果たす役割が十分であるとは思えません。子供たちが社会に出た時に、どのように考え立ち振る舞っていくべきなのか、その資質・能力・態度を追求したのがESDであったとすれば、次はそれを社会の変化とするために、どのような具体的手段を自ら選択し、進めていく手段を身に付けていく必然性に迫られます。

本校では、その鍵はアントレプレナーシップ教育にあると考えます。今後の変化の激しい社会に対応し、一人一人が「このままではいけない」という社会的情動に至る動機を育むための素地を養っていくことが、私たちが着目しているアントレプレナーシップ教育の目指すべき方向性です。

これまでの研究において、本校の児童は、生活科や総合的な学習の時間で学んだ事柄によって、自己肯定感や自己有用感を育み、主体的に学習に向かう力の育成に一定の成果を得てきました。そこで、アントレプレナーシップ教育の視点とこれまでの研究との関連性を明らかにしていくことで、児童の中の「関心」をこれまで以上に高め、将来にわたって「発信・行動する」人材育成にまでにつなげることが出来ると仮定し、研究を進めてきました。

例えば、教員間でアントレプレナーシップ教育の理念や考え方についての理解を深めることを手始めに、児童が自分なりの課題を見つけ、その解決に向けて持続可能な社会づくりにつながる学びを積み重ね、学んだことを社会の一員として将来にわたって実践・発信していくことができる人となることを目指し、学習活動に取り組みました。また、単元構成等の見直しを図りながら、学校や地域、首都圏の環境を生かした体験活動をさらに開拓して取り入れ、発表・発信の場の提供や工夫を行うことで、学びへの肯定感・有用感を

もたせることにつなげました。その結果、学年当初と学年末に児童に行ったルーブリックや、学習の中でのポートフォリオ(e-ポートフォリオ)、発表・発信の様子などからも、児童の持続可能な社会づくりへの考えと意志が育成できたことが見て取れました。

今後、児童が主体的に判断し、思考・判断・表現をしていく力のさらなる育成と共に、考えたことを具体的にどのような手段で進めていくのかという「考えたことを具現化していく力」のアプローチ方法に取り組んでいきます。

外国語指導助手（ALT）と協働した英語教育の推進
～日常の学校生活における英語での会話にあふれた学校づくり～

江戸川区立小岩第二中学校

1 学校の概要（令和7年4月1日現在）

本校は、昭和22年に開校し、本年度78年目を迎える。校地は、江戸川区の北端の小岩地区に位置し、繁華街から少し離れた住宅街にある。令和4年度からSDGsの実践に配慮された新校舎に移転した。



「生徒が自ら考えて行動できる学校」「校内で常に英語が聞こえる国際色豊かな学校」「SDGsを推進しボランティア活動が活発に行われる学校」を目指す校風に掲げ、令和5年度から3人のALTの常時配置が始まり、令和6年6月から姉妹校となったHawaii州Honolulu市にあるEwa Makai Middle Schoolと交流をするなど、充実した英語教育を実践している。

（1）在籍生徒数

576名

（2）学級数

第1学年5学級、第2学年5学級、第3学年5学級 ※特別支援巡回教室拠点校

（3）教員数

教員32名、非常勤講師3名、栄養士2名、事務3名、スクールカウンセラー3名、用務主事2名、スクールソーシャルワーカー2名、副校長補佐1名、スクールサポートスタッフ1名、ステップサポーター1名、別室指導支援員2名

2 教育活動実践の内容

本校は令和6年度から、江戸川区教育委員会の「英語教育推進モデル校」として3名の外国語指導助手（以下、ALTと呼ぶ。）が常駐している。全ての授業にALTが参画することに加え、日常的に生徒が英語に触れる機会を設けることで、常に英語が聞こえてくる学校となった。また、スピーキングテスト（ESAT-J）や英語検定の前には、ALTによる補習を行い、スピーキングテスト（ESAT-J）ではAランクの生徒が前年比の14倍に、英語検定では3級、準2級、2級の2次試験合格率が90%以上など、令和6年度の1年間だけで、その成果が表れている。令和7年度もALTの3名体制は継続していく。さらに英語に触れる機会を増やし「英語を恐れない生徒」、「自ら英語で話しかけられる生徒」を育成し、「全ての生徒が英語で会話できる学校」を目指していく。

（1）朝の挨拶運動

ALTが毎朝、昇降口前で挨拶運動を行っている。挨拶だけでなく、会話をしてコミュニケーションをとる生徒も増えている。

(2) 昼休みの英会話教室

昼休みには英会話教室を行っている。より多くの生徒に参加の機会を設けるために、各クラスの班ごとに全校生徒が順番に実施している。

(3) 帰りのホームルーム

帰りのホームルームも全クラス週に1回、ALTによる英語でのホームルームを行っている。翌日の持ち物や教科の連絡を英語で伝えられるようになった。

(4) 休み時間の様子

いつでもALTがいることで、休み時間も自然に英語で会話をする生徒が増えている。また、ALTを英語で遊びに誘ったり、腕相撲を挑んだりするなど、交流を深めている。

(5) 運動会

運動会では、日本語のアナウンスに加えて、英語での競技の説明を行っている。生徒だけでなく、保護者や地域の方に対しても本校で取り組んでいる英語教育のアピールになっている。

(6) 放課後イングリッシュクラブ

令和7年度より放課後の4日間、ALTによるイングリッシュクラブを始めた。生徒には、参加条件を付けずに開設している。内容はALTが考えたゲーム、英語による音楽や映画鑑賞、英語でクッキング、英語の勉強など日によって異なる。

(7) 放課後補習

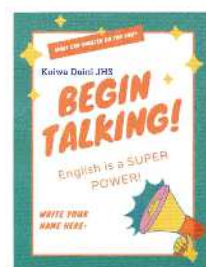
英語検定前やスピーキングテスト（ESAT-J）前には補習を行っている。

(8) ALTと協働した授業

各学年に1名のALTを配置し、毎回の授業を行っている。生徒の発話機会をより多く設定するとともに、教材の開発についてもALTとJTEの協働で行っている。また、外国語（英語）以外の授業にもALTが参加することもある。

(9) オリジナル教材の開発

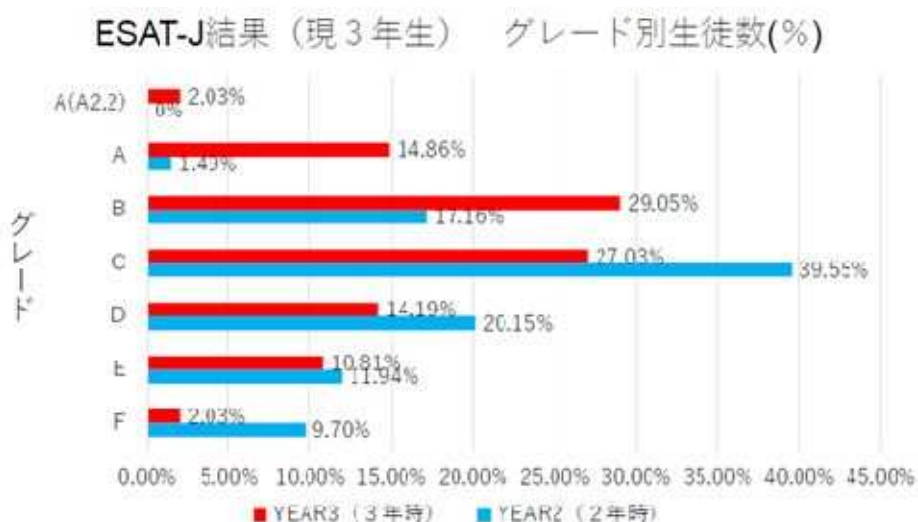
学校とALT、ALT派遣会社が協力し、独自の英語の問答集教材を作成し、生徒に配布して活用している。授業だけでなく、昼の英会話や放課後のEnglish Clubでも使用している。



3 まとめと今後の課題（展望）

(1) 成果

以下に示す ESAT-J と英語検定の結果から、1年目の結果としては顕著に効果が表れた。授業を見ていても、各学年、生き生きと英語を使って会話活動を行っている様子が見られる。この環境であれば、英語を使う機会が多くなり多くの生徒が英語で会話できる力がつくと思われる。本校が行っているこの取組は、東京都が目指す「グローバルに活躍する人材の育成」に繋がるものと考えられる。



令和6年度 英検結果

一次試験(筆記・リスニング)

	学年	1回目(5月)			2回目(9月)		
		受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
5級		14	14	100	23	22	95.7
	1	10	10	100	21	20	95.2
	2	4	4	100	2	2	100.0
	3	—	—	—	—	—	—
4級		12	8	66.7	24	19	79.2
	1	3	0	0	11	9	81.8
	2	9	8	88.9	13	10	76.9
	3	—	—	—	—	—	—
3級		22	15	68.2	26	18	69.2
	1	1	1	100.0	2	1	50.0
	2	7	5	71.4	9	6	66.7
	3	14	9	64.3	15	11	73.3
準2級		11	4	36.4	24	6	25
	1	1	0	0.0	1	0	0.0
	2	1	0	0.0	7	1	14.3
	3	9	4	44.4	16	5	31.3
2級		6	2	33.3	3	1	33.3
	1	—	—	—	—	—	—
	2	1	1	100.0	—	—	—
	3	5	1	20.0	3	1	33.3

二次試験(スピーキング)

	学年	1回目(7月)			2回目(11月)		
		受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
5級							
	1						
	2						
	3						
4級							
	1						
	2						
	3						
3級		16	16	100	18	18	100
	1	1	1	100	1	1	100
	2	5	5	100	5	5	100
	3	10	10	100	12	12	100
準2級		6	6	100	7	6	85.7
	1	—	—	—	—	—	—
	2	—	—	—	1	1	100
	3	6	6	100	6	5	83.3
2級		2	1	50	2	1	50
	1	—	—	—	—	—	—
	2	1	0	0	1	1	100
	3	1	1	100	1	0	0

(2) 今後への展望

授業だけでなく、日常の中でALTと生徒との関わりを、今後もより多く設定することで、「日常的に英語が飛び交う学校」を目指し、質問に答える力のさらなる向上とともに、質問する力・自分の考えや意見を伝える力の向上を図っていくためのALTの活用方法の工夫をしていきたい。

4 その他特記すべき事項

(1) 令和6年6月 Hawaii州Honolulu市Ewa Makai Middle Schoolと姉妹校締結

(2) 令和6年度 江戸川区教育委員会 英語教育推進モデル校

「読み解く力」を育成する取組の開発や活用に向けた小中学校の取組

板一中 小中一貫学びのエリア

(板橋区立板橋第一中学校・板橋区立板橋第二小学校
・板橋区立板橋第六小学校・板橋区立板橋第七小学校)

1 団体の概要

学びのエリアとは、板橋区が区内小中学校を22の中学校区ごとに分けた、区立幼・小・中学校のグループのことである。板一中 小中一貫学びのエリアは、板橋第二小学校、板橋第六小学校、板橋第七小学校、板橋第一中学校の4校である。

このグループは、保幼小接続・小中一貫教育を推進し、学びの継続性を意識した授業を実施するとともに、小一プロブレムや中1ギャップと呼ばれる教育課題にも効果的に対応していくために設定されている。



2 教育活動実践の内容

(1) 平成31年(令和元年)度

板橋区では、学力面における課題を解決するために、「読み解く力」の育成を一丁目一番地の施策として位置付け、各学校において「読み解く力」の育成に向けた取組がスタートした。その取組の検討や推進を図るために、「読み解く力」開発推進委員会を発足した。

板一中 小中一貫学びのエリアは、「読み解く力」開発重点校として令和元年度から令和3年度までの指定を受け、板橋第一中学校、板橋第二小学校、板橋第六小学校、板橋第七小学校を中心に、研究・実践を積み重ねた。

(2) 令和2年度

板一中 小中一貫学びのエリアによる研究・実践などの積み重ねを「読み解く力」中間報告会にて報告した。報告会では、授業公開やパネルディスカッション、文部科学省審議官による講演等を実施した。その内容は板橋区教育委員会事務局が「中間報告リーフレット」として取りまとめ、区内各校に配布した。

(3) 令和3年度

「読み解く力」開発推進委員会の成果物である「iカリキュラム（読み解く力）」が完成し、板一中 小中一貫学びのエリアでは、授業公開の実施とともに、完成したiカリキュラムについての利用・検証の成果についての発表を行った。板橋区教育委員会事務局では「読み解く力」リーフレットを作成、各校に配布し、開発重点校の取組を周知した。



(4) 令和4年度・令和5年度

板橋区教育委員会事務局では、「読み解く力」開発推進委員会、「読み解く力」開発重点校を更に発展させ、「読み解く力」推進委員会、「iカリキュラム（読み解く力）活用実践校」とした。板一中 小中一貫学びのエリアは、活用実践校として指定を受け、カリキュラムの活用に向けて、研究・実践を積み重ねた。同時に、エリアの取り組みについて全国各地から視察の依頼を受け、成果等の報告、説明等を行った。

(5) 令和6年度

「iカリキュラム（読み解く力）活用実践校」が拡大され、他の学びのエリア（加賀中学校、加賀小学校、金沢小学校）が新たに指定されたことから、板一中 小中一貫学びのエリアは、これまでの活用実践校としての実績を基に拡大校3校を支援した。

また「読み解く力」推進委員会において、学びのエリアの取組や実践報告・協議を継続して行うとともに、カリキュラムの活用に向けた研究実践を積み重ねた。「iカリキュラム（読み解く力）活用実践校」報告会を年間9回実施したほか、年間を通じた授業公開や、「参観者が授業を語る」を念頭にした協議会（「iカリキュラム（読み解く力）活用実践校」報告会）などを行い、その成果を区内の小中学校に広めた。



3 まとめと今後の展望

板一中 小中一貫学びのエリアでは、「読み解く力」の育成に向けて工夫した取組が実践された。また、取組の成果の一端として、板橋区の全国学力学習状況調査の結果が、東京都平均と同等になるまでの向上に寄与した。同時に、北海道から沖縄まで、全国各地から視察を受け入れるなど、全国の教育の発展・向上にも貢献した。



令和7年度からは、板橋区教育支援センターより、令和7・8年度 板橋区教育研究奨励校の指定を受けた。その研究内容は、子どもたちが、自分に合った学習内容、方法、ペース、順序を自己選択、自己決定し、学びを自己調整しながら進める学習過程である板橋授業スタンダードSを実現するためのものであり、『自己で選択・決定・調整できる授業等による学力の定着・向上 ～読み解く力の基礎的読解力を基盤にして～』を研究主題とした研究に取り組み始めた。

さらに今後の研究を通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、主体的・対話的で深い学びに向けた授業の改善を継続的に行っていく。

全教職員一丸となって9年間で一人一人の可能性を最大限伸ばす義務教育学校の実現

八王子市立いずみの森義務教育学校

1 学校の概要

本校は、令和2年4月に多摩地域初の義務教育学校として開校した学校である。開校以前から八王子市教育委員会の支援の下、初の義務教育学校開校に向けた準備を、当時の第六小学校、第三中学校の教職員が地域と連携しながら進めてきた。熱意ある教職員による教育課程等検討委員会での協議や開校に向けた校内研究等の取組の成果で、9年間の特色ある教育課程を編成して開校を迎えることができた。



開校6年目を迎える現在、児童・生徒数が1,400名を超える大規模校であるが、開校時から勤務する教職員の尽力により、開校時の理念を継承し、全教職員が一丸となって9年間で子供たち一人一人の可能性を最大限伸ばす教育を、地域と連携して進めている。

【沿革】

- ・昭和16年4月1日 東京府八王子市立第六国民学校 開校
- ・昭和22年4月1日 八王子市立第三中学校 開校
- ・平成24年4月1日 小中一貫校八王子市立いずみの森小中学校 開校
- ・令和2年4月1日 八王子市立いずみの森義務教育学校 開校

【学校基本情報】

児童・生徒数	1,406名（令和7年4月現在）	教職員数	130名
職員構成	校長1名、副校長4名 主幹教諭5名、主任教諭28名、教諭51名、養護教諭3名、サブジェクトティーチャー1名、非常勤教員1名、時間講師17名、副校長補佐1名、都事務主任2名、市事務2名、市用務主事3名、特別支援教室専門員2名、栄養士1名、スクールカウンセラー3名、ALT1名、学校図書館司書1名、スクールサポートスタッフ3名		
住所	〒192-0904 東京都八王子市子安町二丁目18番1号		
ウェブページ	http://hachioji-school.ed.jp/izmme/		
アクセス	J R「八王子」駅南口下車 徒歩10分 京王線「京王八王子」駅下車 徒歩15分		



2 教育活動実践の内容

(1) 義務教育学校の運営

開校当初より9年間で一人一人の可能性を最大限伸ばす教育活動を行っており、「学校・家庭・地域の協働の下、全教職員が一丸となって、未来を切り拓く児童・生徒を育てる」ことをスローガンとし、笑顔あふれる学び舎づくりをすすめている。また、地域運営学校（コミュニティ・スクール）でもある本校の特色を活かし、9年間の系統性・連続性あるカリキュラムと地域の教育力との融合を図った教育活動の一層の充実により、教育目標「創造・共生・健康」を実現するための児童・生徒の学力の保障と向上、豊かな心の醸成、心身の健康・鍛錬を目指している。



本校の特色ある教育活動として、共生社会で生きる力を育むために、第1学年から第9学年の全校児童・生徒で構成する異学年交流を充実させている。兄弟・姉妹のようなより良い人間関係を築きながら、継続した指導によって全校児童・生徒の一体感を創り出している。具体的には、全校縦割り班での「わくわく清掃」「わくわく遊び」、大運動会における4色の縦割り応援合戦などが挙げられる。

令和7年度現在、1,400名を超える児童・生徒が在籍している状況であるが、知的固定特別支援学級や難聴言語通級指導学級、特別支援教室拠点校も有する本校において、児童・生徒が日々、安全・安心な学校生活を送ることができているのは、約130名の教職員一人一人の熱意や教育的愛情、主幹教諭や主任教諭を中心とした組織力の賜物である。若手・ベテラン関係なく、指導力向上に向けた研究や情報交換、定期的なOJT等が計画的かつ日常的に行われており、開校当初に懸念されていた小学校と中学校



との文化の相違からの心の壁は皆無となり、現在は一つの教職員集団として組織的な学校運営が成されている。このような人間関係や雰囲気づくりを醸成してきた教職員の功績は大変大きい。

(2) 地域運営学校（コミュニティ・スクール）としての取組

本校は、八王子市が掲げる「地域の子供は地域で育てる」という方針の下、平成29年度に学級運営協議会を設置し、地域運営学校（コミュニティ・スクール）として地域と連携した取組を進めている。委員は、町会長、いずみの森協働本部、青少対地区委員長、主任児童委員、保護司、住民協議会、PTA会長、校長から成る10名であり、定例会として年間10回の会議を開催している。会議では、地域と連携した行事の確認や教育課程編成、学校評価結果に関する熟議などを行っており、委員の意見を教育活動に反映させている。

学校運営協議会の取組としては、各町会、八王子市防災課、消防署、青少対防災教室と連携した防災教室、児童・生徒が毎回 300 人以上参加する地域美化活動、いずみの森協働本部主催によるクリスマスコンサート、学校と地域、それぞれの活動や取組を一覧できるコミュニティ・カレンダーの作成などを行っている。また、令和 5 年度からは、卒業生・保護者・地域・教職員・在校生が集える「地域サマーフェスタ」を 8 月に開催し、卒業生や在校生の舞台発表、歴代の卒業アルバム閲覧コーナーの設置など、

地域の大同窓会となる取組を進めている。これらの取組を継続してきたことで、地域の子供を地域で育てる土壌づくりが醸成されていることが、大きな成果である。



さらには、本校には学校運営協議会で熟議された事案を形にする実働部隊となる「いずみの森協働本部」がある。この協働本部は、平成 24 年のいずみの森小中学校開校当初に地域住民により礎が築かれ、令和 2 年度の本校開校を契機に取組が充実し、児童・生徒の安全・安心な学校生活のために学校を支援してきた。具体的な取組として、英語検定や漢字検定などの学習支援、1 年生入学初期段階における学級担任サポート、地域と学校の交流の場所となる「いずみの森クラブ」の運営など

を行っている。令和 6 年度からは、東京都教育委員会「校内別室指導支援員配置事業」における地域人材の発掘、コーディネートの役割を担い、児童・生徒の居場所づくりや登校支援、教職員の負担軽減において大きな成果を上げている。

3 まとめと今後の課題（展望）

本校の開校に携わった教職員が、開校後も学校運営の中心となってこの 6 年間活躍してきたことで、保護者や地域からの厚い信頼を受け、開校時の理念を引き継ぎながらも毎年バージョンアップした教育活動が全教職員で展開できている。また、地域運営学校としての取組を継続してきたことで、地域で育つ子どもを地域と共に育むための土壌づくりが醸成されてきている。

これらの取組の成果として、全国学力・学習状況調査における質問紙調査では、自己肯定感が高い割合や相談できる大人がいる割合が全国平均を 10 ポイント以上上回る結果となっている。

今後も、地域との連携を一層強化し、義務教育学校としての 9 年間の系統性・連続性ある教育活動を継続し、全教職員一丸となって子供たち一人一人の可能性を最大限伸ばせる学校づくりを目指していきたい。



日本の伝統芸能である「和太鼓」の技術継承および全国大会出場

東京都立篠崎高等学校和太鼓部

1 学校の概要

本校は、昭和52年度に開校して以来、一貫して「地域に愛される学校」の精神を大切にし、その責務を果たすよう努めている。そして、「伸ばしますあなたの可能性」を本校教職員の合言葉として、生徒の資質・能力を向上させるとともに、希望進路の実現に向けて取り組んでいる。また、本校では、探究的な学びと



協働的な取組をとおして、他者への思いやりの心を育むとともに、「探究力を磨き、地域社会に貢献できる人」を生徒の将来像として取り組んでいる。学校規模は21学級で生徒数は806名である。

令和8年度に創立50周年を迎える本校は、東京都教育委員会から「地域探究推進校」、「海外学校間交流推進校」、「安全教育推進校」の指定を受けており、これまで以上に、大学や企業、自治体や地域等と連携を深めながら教育活動を更に充実させているところである。

<教育目標>

自分の良さを認識し、多様な人々と協働しながら、変化の激しい社会の担い手を育成する

○基礎学力を培い、自ら学び考え行動する力を育てる

○自らを律し、互いの人格を尊重し、多様性を重んじる態度を育てる

○自己肯定感を高め、社会に貢献する精神を育てる

2 教育活動実践の内容

(1) 令和4年度の実践

コロナ禍で多くの部員がいなくなり上級生がいない中、新入生である1年生と共に全国大会を目指す部活として、チーム名を「和桜乱舞」とし活動を始める。前年度から継続して本校の卒業生に指導をお願いするも、大会では大きな結果を残すことはできなかった。



一方、江戸川区制90周年記念江戸川区民まつりを始め、地域のイベントに参加し演奏を披露すること、「Japan Pom Pom 27周年チャリティショー」に参加するなどボランティア演奏を通し、伝統芸能を広める活動に力を入れた。

(2) 令和5年度の実践

前年度指導者の都合で指導者がいなくなったことから、全国大会出場経験校である東京都立美原高等学校和太鼓部卒業生の2人を指導者として招き、演奏曲を一新し、さらなる技術向上を目指した。1人は演奏曲に対する高い指導力を持ち、もう一人は部員のメンタル指導や、日々の技術指導に高い指導力を持つことから、日本太鼓ジュニアコンクール東京大会では特別賞、東京都高等学校文化連盟郷土芸能部門中央大会では金賞を受賞するなど、高い評価を得た。



また、地域でのボランティア演奏に加え、中学生との合同演奏や、インターナショナルスクールとの国際交流を経て、合同演奏するなど、年代、国を問わず、伝統芸能を広める活動に力を入れた。

(3) 令和6年度の実践

指導者として、本校の卒業生を加え、新入部員が入ったことで、初めて3学年そろって練習することができるようになる。全国一の太鼓のお祭りである「成田太鼓祭」に出場することができ、知名度が広がる。また、第39回国民文化祭 第24回全国障害者芸術・文化祭「清流の国ぎふ」文化祭2024「太鼓の祭典」に出場し、活動範囲が全国へと広がる。大会で



は、日本ジュニアコンクール東京大会で最優秀賞を受賞、第1回全関東日本太鼓ジュニアコンクールで優勝し、日本太鼓ジュニアコンクール全国大会に出場した。また東京都高等学校文化連盟郷土芸能部門中央大会では、前年度から2年連続で金賞を受賞し、4位という成績を収めた。

一方、文化庁の邦楽普及拡大推進事業にも採択され、伝統芸能である和太鼓の技術を継承していくことに力を入れた。

3 まとめと今後の課題（展望）

本校の入試倍率の影響が大きいと思われるが、部員の人数が少ないため、部員確保に力を入れ、演奏の幅を広げていきたい。また、全国大会へ出場し、賞を受賞することを目標に和太鼓の高い技術の継承を継続して取り組んでいく。

